

獻辭

我らが尊敬する名譽教授山田俊雄氏、昨年六月、學長職を満了して本學を去りき。よつて、國文學專攻にゆかりの者どち、盡くるなき惜別の思ひを拙き一篇に籠め、『成城國文學論集』第二十三輯・第二十四輯を編みて氏に捧ぐ。

氏の初めて本學の教壇に立ちてより、四十年の星霜を経たり。しかも學生を指導する傍ら、學内の要職に就きて運営に盡力すること二十三年の長きに及ぶ。餘人の到底爲しうべきことにあらず。また、文部省の諸委員をはじめ、學會の評議員等、多くの要職を勤むるなど、學外における功績もまた顯著なり。

碩學の家に生を享け、嚴しき庭訓の中に育ちたる氏の歩める道は、國語學。なかんづく文字論・語彙論の研究にあつては、さながら無人の野を行く勢ひもて、常に新分野を拓きて學界を領導す。その方法は精緻堅實の極みにして、學界に蔓りがちな輕佻を戒め浮薄を糺すに、利き言葉の刃を收むることなし。その業績は、次輯卷末に掲げたるも、數ふるに勝へざることし。

氏は學問の人なり、また趣味の人なり。特に繪筆を採れば玄人の域に迫る。われらは祈る、激職より解き放たれて心ゆくまで繪心を樂しむ平安に恵まれんことを、かねて筆を進めたる大いなる著述の速やかなる完成を。また願ふ、渝らぬ滋眼を、われら後進に厳しく注がれんことを。

一月二十日

工藤 力 男